

愛を学ぶ 父親 と おさげの娘

じーこ澤田

娘の幸せを願う父親がいた。

おさげの似合う愛くるしい娘を、父親はとても愛していた。

そんな娘にはやりたいことがあったが、父親が考えるその時代の幸せとは、ほど遠いものだったので、娘がやりたいことをするのを、父親は許さなかった。

父親は娘に幸せになってもらいたかったので、父親の理想の生き方を、娘に押しつけた。

娘も父親を愛していた。父親を悲しませたくなかった。

だから、娘は父親に反抗しながらも、父親を裏切ることが出来ず、

父親の言うがままの人生を嫌々ながらに、受け入れていた。

やりたいことを出来なかった残念な気持ちはいつまでも晴れることもなく、

父親への反抗心も胸に秘めたまま、魂にその無念さを刻み込んで、娘はその人生に幕を閉じた。

娘より先に人生に幕を下ろした父親だったが、娘の思い描く幸せに気がついてあげることが出来ず、本当に娘が望む幸せを与えてあげられなかったことに、死んで魂となってから気がついた。

この人生の失敗を挽回すべく、父親は生まれ変わり、また子どもを持つ父親となった。

今度の子どもには、やりたいことをやらせてあげたいと思ったが、それに反対する母親の存在に、意見をぶつけ合うこととなった。

前世の失敗を繰り返さないようにと、子どものやりたいことを必死に応援していたが、応援すればするほど、母親と意見がぶつかる。母親を説得しようと、夫婦ゲンカの絶えない日々が続いた。

しかし、ある時、父親はふと気がついた。

前世での失敗は、自分の理想を娘に押しつけ、自分が思い描く人生を相手に押しつけたことだ。

今回の人生でやっているのは、子どもに自由な人生を送らせてやりたい・・・と言う自分の理想を、妻に押しつけている・・・のではないか。

相手は変わったが、やっていることは同じ！！??

自分はまた、同じ失敗を繰り返そうとしている。

人はそれぞれ考え方が違う。親子といえど、興味、関心、幸せの感じ方が違うのだ。

相手を尊重し、相手が幸せをつかむチャンスを応援してあげることが、

自分が学ぶべき『 **本当の愛** 』なのではないか。

前回の人生でそのことに気づけなかったので、また、同じチャレンジを今世でしていることに、父親は気がついた。

自分が学ぶべき課題がやっと分かり、何か、とても心がラクになり、気持ちが軽くなった。心の中をそよ風が吹き抜けるような気がした。

父親はやっと、繰り返し生まれ変わりながら、学んでいるテーマに気がつくことができたのだ。

~~~~~

それからしばらくして、

父親は前世で娘だった・・・、あのおさげの似合う娘の魂の 生まれ変わった存在である女性に出会った。

前世でおさげの似合う娘だった女性も、今世では既に子どもを生み、3児の母親となっていた。

母親となった娘は、悩みを抱えていた。

その次男が自分と考え方が違うことが受け入れられず、次男に幸せになって欲しいと、母親としての自分の考えを押しつけていたのだ。

なんと、前世での父親と同じ体験を、前世とは立場を変えて母親となり、自らの身で体験していたのである。

当然、次男は反発して、母親に逆らっていた。

どうして良いか分からない母親になった娘に対して、前世で父親だった男は、やっと前世での自分の娘に、

本当の『愛』を伝えることが出来るチャンスがやってきたのだ。

父親だった男が伝えたいことは、こんな事だった。

~~~~~

娘が大好きで、幸せになってほしいからこそ、自分が思う幸せの形を押しつけていたが、娘が思う幸せの形は、自分の思うモノが全てではなかったこと。

押しつけようとしたのも、娘を想う父親としての愛だったこと。

でも、相手の個性を尊重し、娘なりの幸せをつかむことをサポートすることが、自分の本当の愛に近い表現であり、娘にとっても幸せになる近道であると今は気がついたこと。

~~~~~

『 純粋な愛は必ず、至福の喜びをもたらす。』

こんな想いを、

父親は前世のおさげの娘である、今は次男に手を焼いている母親に、今度は押しつけではなく伝えたいと、一生懸命に連絡をとり、メッセージを送った。

今回の人生で、父親とおさげの娘は、『 純粋な愛 』についての学びを完了するのだろう・・・と、思っていた。

しかし、『 愛 』はもっともっと深いものであることを、父親はこれから知ることになる。

次男に手を焼いていた母親・・・つまり、おさげの娘に、

「自分の理想を押しつけず、相手の気持ちを尊重することの大切さ」  
を、父親は伝えようと思い、

分かりやすく受けとりやすいように物語として、次男との接し方をアドバイスした。

おさげの娘であった母親もその言葉に耳を傾け、父親のアドバイスを受け入れた。

そのことが父親はとても嬉しかった。役に立てている気がして、嬉しくて満足感を感じていた。

しかし、ある時、おさげの娘からの返事がプツリと来なくなった。

3日経っても、1週間経っても、返事は来ない。

何か気に障ることを言ってしまったか？

嫌われてしまったのではないだろうか？

と、メールの内容を確認してみるが、特にそのような内容はひとつもない。

返事を催促するのも、自分の気持ちの押しつけになる気がして、じっと返事を待ったが、1か月経っても返事は来なかった。

もしかして、事故？ 病気？

父親は何が起こっているのか心配になり、神様に相談してみた。

父親「なんで返事が来ないのでしょうか？」

神『それは、お主のためだ。』

「僕のため？ どういうことですか？」

『お主は前の人生で、おさげの娘を幸せにしようと娘に幸せを押しつけた。

そして、今生では子ども達のためにと、奥さんに理想を押しつけた。』

「はい、そうです。だから、今回その気づきを伝えられる良いチャンスが来たと喜んでいます。」

『それもまた押しつけ！』

「えっ？」

『お主は相手のためと言うが、それは相手が求めているのか？』

「えっ、・・・それは・・・、分かりません。 相手のためになるだろう・・・としか、思っていませんでした。」

『実はな、おさげの娘とは、もっと昔にちがう人生と一緒に暮らしていたことがあるのじゃ。』

「そうなのですか。」

『その時、お主とおさげの娘は、夫婦だったのじゃ。』

「えっ、我々が夫婦ですか？」

『そうじゃ。様々な形でお主たちは命の関わり合いをしているのじゃ。』

「そうなのですか。」

『その夫婦だった時、子どもを一人授かった。その息子が今、おさげの娘が手を焼いておる次男じ

や。この二人の縁も深い。

二人は今、お主がおさげの娘にやったのと同じように、自分の考えを押しつける体験をしながら、相手の考えを尊重する学びをしておるのじゃ。』

「僕と同じなのですね。」

『そうじゃ。だが、本来、お主が本当にとり組みたい体験は同じではないのじゃぞ。

押しつけの体験は、お主はとうに卒業しても良かったのじゃ。なかなかそのタイミングに気づけずここまで来てしまったがな。お主はその「押しつけと反発」のやりとりを「見守る」という体験をしようとしておるのじゃよ。』

「どういうことですか？」

『その「見守る」とは、上手いこうが上手くいくまいが見守る、「無条件の愛」を体験したいと言う事じゃ。

上手いかない相手も「素晴らしい存在」であることが分かっていないと、見守りはできない。そして、本人が選んでいる学びのテーマを体験して、自ら成長していくのを信頼できていないと出来ないことなんじゃ。

「見守る」とは、なかなか難しいことなんじゃよ。お主はその体験と学びをしようとしておるのじゃよ。』

「そうなんですか。おさげの娘から連絡が途絶えたのは、そこと関係があるのですか？」

『そういうことじゃ。お主はおさげの娘の生まれ変わりである女性と出会い、ここぞとばかりに自分の気づき、学んだことを伝えようとしたじゃろ。』

「はい、それが前生の自分がしてしまったことへの償いになると思ひまして・・・。」

『お主は今、本当にとり組みたいのは、「見守る」体験じゃ。忘れてしまい、なかなか思い出せずにいるがな。相手の存在の素晴らしさを認め、相手の成長を信頼すること、そして、その取り組みをさせてくれる相手の存在に感謝すること。それらの気づきが、さらにお主の魂を磨くこととなる。

おさげの娘は、お主を愛している。お主の魂の成長を心から願っている。

だから、おさげの娘の魂は、お主に「見守り」のテーマを気づかせたくて連絡を途絶えさせたのじゃ。

おさげの魂はこう言うておる。

『私と次男はお互いの関わり、学びを もう少し時間をかけて、じっくりと とり組んでいきます。

あなたはあなたの本当の取り組みに気づき、私たちに構わずに、あなたの本当に望むステージに進んでください。

その事に気づいて欲しくて、今回の再会が起きました。

しかし、今のまま、今生の私たちに関わっていたら、あなたはまた私たちをサポートする人生を歩んでしまう。私たちは大丈夫ですから、あなたは進んでください。

それが私たちの願いです。

だから、今生で関わるのは、ここまでにしましょう。』

父親である男の頬を涙がつついた。

「連絡が途絶えたことに、そんな意味があったなんて・・・、ううう。」

胸が熱くなった。おさげの娘の大きな愛が、どっと父親の心に流れ込んできた。温かい無条件の大きな愛に包まれる。

「なんて、温かいのだろう。」

関わらないことに、こんな大きな愛があったなんて、思ってもみなかった。

僕はみんなを支え、サポートしているつもりでいたけど、僕の命はみんなの愛でできていたんだ。

ず～と、ず～と前から。」

『そのとおりじゃな。



お主が大切な人を支え、相手をサポートして役に立とうとしているうちは、相手は本当の自立は出来ない。

そして、お主も本来とり組みたいステージに進むことは出来ない。

しかし、相手の**存在**を認め、

相手を**信頼**して、

相手に**感謝**が出来れば、

相手にも 自分にも 新しい道が開ける。

相手に干渉するのではなく、相手の幸せを願うエネルギーを送ってあげなさい。

これを『**祈り**』と言う。

「**見守る**」のは、何もしないことじゃない。

『**祈り**』続けることじゃ。愛と喜びのビジョンをエネルギーとして相手に送り続けることじゃ。

今のお主ならできるじゃろう。やってみなされ。』

「はい、分かりました。

このことに気づくのに、ずいぶん長く時間をかけてしまいましたが、一歩 前に踏み出します。」

『うむ、おさげの魂も喜んでおるぞ!』

おわり

じーこ

2015年 秋